

【地域・産業】

知多半島の「自然・暮らし・文化」

——アクティブラーニングの試み——

日本福祉大学社会福祉学部 教授 岡 多枝子

はじめに

2012年に、中央教育審議会の質的転換答申⁽¹⁾においてアクティブラーニング⁽²⁾⁽³⁾が施策化されたことで、教授（teaching）から学習（learning）へのパラダイム転換⁽⁴⁾⁽⁵⁾の理論と実践が注目されている。

筆者はこれまで、日本福祉大学のキャンパスがある知多半島を中心として、フィールドワーク（FW）や⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾、サービ斯拉ーニング（SL）活動への支援、教職課程学生の指導等を行ってきた。その結果、学生の能動的で協働的な学びが、大学と地域社会の連携による福祉コミュニティの創造に寄与するとの手応えを得た⁽⁹⁾。本稿では学生たちの活動から3事例（篠島、南知多町郷土資料館、美浜町布土の民話発掘）を取り上げて、アクティブラーニングの理念に照らした実証的検討を行う。

1. 脆弱なコミュニティ

戦後の日本社会における高度経済成長は、貧困や感染症からの脱却と、安全で豊かな生活をもたらし、科学技術・医学の進歩や栄養改善とも相まって、健康で長寿を享受できる時代が到来した。

反面、急速な都市化と少子高齢社会の進展、核家族化をはじめ家族形態の多様化の中で、近隣や地域との関係性が希薄化し、従前の家庭や地域が担ってきた相互扶助や住民同士の交流の場も失われつつある。子どもや若者が地域の文化や人々の暮らしに接する機会も減少している⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。

こうしたことから、子どもや若者が地域の一員として課題を解決する役割を期待され、それを遂行する営みを支援する社会システムの再構築が求められている。

2. ゼミで陶冶

日本福祉大学社会福祉学部では、2009年度から、体験学習を通して「自己形成力を育むSLプログラム」⁽¹²⁾を2年次教育に導入した。筆者もゼミ担当教員の一人として参画する機会を得た。SLを含む筆者のゼミでは、第1に活動内容や活動先は「自己開拓」する、第2に学びは教室とフィールドと図書館の「トライアングル」で行う、第3に学びや研究を「グループKJ法」で共有する、第4に学会やフォーラム、合



図1 SLバスツアー（ティレクティレセク美術館 横2014春）

宿等に1年から4年の「合同ゼミ活動」として参加して交流すること等を大切にしてきた。以下はその概要である。

(1) 自己開拓

学生たちは、活動先を確保するまでに10回以上の電話やmail、FAXによる打診・依頼を繰り返すことも珍しくなかった。決まりかけた福祉現場を新型インフルエンザの流行によって断念せざるを得ないこともあった。打診先からSLの説明を求められることや、活動の目的を詳しく聞かれることもあった。それだけに活動先が決まった時の嬉しさはひとしおであり、また、事前に「なぜ、何を、どのように」活動するかを明確化することもできた。

(2) トライアングル

学生たちは、教室で練りに練った企画を持ってフィールドに出るが、現実社会の矛盾や不条理を突き付けられて、計画の変更を余儀なくされることも少なくなかった。他者と向き合うことで、未熟な自己に直面して立ちすくんだり冷や汗をかいたりもした。それら現場での葛藤や悩みを教室に持ち帰り、ゼミで共有するとともに、図書館の文献や資料を紐解き課題解決の糸口を求めた。先行研究や先行実践に示された知見が原動力となり、再度フィールドで学び直しと考察を深める好循環もみられた。



図2 社会福祉教育セミナー（同志社大2015秋）

(3) グループKJ法

また、学生たちは活動や文献研究を踏まえて、グループKJ法を用いて活動のリフレクションと質的統合を試みた。

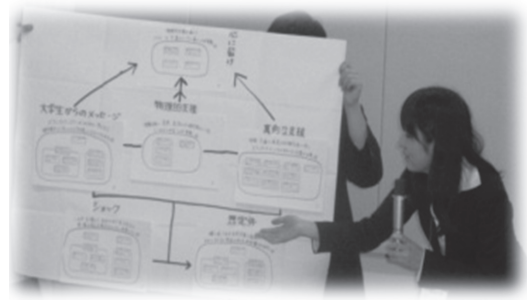


図3 ゼミ合宿でKJ法研修⁽¹³⁾（同志社大2011秋）

川喜田(1986)⁽¹⁴⁾に則って討論を繰り返して作成したラベルを統合したグループ（島）に概念（表札）を与えて配置し、関係線で結び「全体図解」を作成する。完成した図解をもとにプレゼンや叙述化を行い、活動から得た知見の共有化を図った⁽¹⁵⁾。

野外学問から発したKJ法⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾は、レポートや卒論の研究枠組みの構成や質的データの整理、概念の統合等にも有用である。

(4) 合同ゼミ活動

さらに、学生たちは学年を超えて、多くの学会やフォーラム、セミナー等とともに学び、共同研究や交流を深めた。合宿ではゼミ発表と討論を行い、夜を徹して語り合う姿もみられた。

下級生は上級生の姿に学び、上級生は大人として振る舞う等、双方が成長する機会ともなった。公の場に出かけることが多く、卒業生や他ゼミ生、大学院生やゲストが飛び入り参加することも多く、学生たちの社会性も自然と身についたようだ⁽¹⁸⁾。



図4 ゼミ合宿（琵琶湖2015秋）

次に、活動概要を3例報告する。

3. 「篠島勝手に盛り上げ隊」

（1）島の子どもたちの願い

2009年に篠島現地踏査を行った学生たちは、島民の温かい心と美しい海岸の虜になり、「篠島勝手に盛り上げ隊」を始動させた。島を歩いて道路や医療、買い物等の生活ニーズを島民と共有するとともに、大学図書館の文献から、「篠島の子どもはコンビニや大きい病院等、生活や観光の充実」を願い、大人は「漁業復興への切実な思い」を持っていることを確認した⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾。

そこで学生たちは、島民の声を町に届け、島に関する行政の方針を把握する目的で、南知多町役場を訪問した。これまでの活動報告と篠島の活性化に携わりたい旨を伝えるが、「篠島に使う予算は限られ、これ以上の予算を割くのは難しい」と告げられた。学生たちは意気消沈しながらも役場の関係部局を回り、さらに社会福祉協議会にも赴いて島の経済や産業、福祉等の情報収集を行った。

（2）島民アンケート

現地調査と文献研究、行政訪問の結果、町の予算という壁に直面した学生たちは、打開策を練る中で小学生以上の全島民（約300世帯900名）を対象としたアンケート調査の実施を決断した。島民が島での暮らしをどのように捉え、展望を抱いているのかを把握し、島での生活が向上する一助となるのを願っての調査である。

調査用紙や依頼文書の検討・作成と封入、手作り名刺の裏に感謝の言葉を認める作業を、メンバー4人が徹夜で行った。篠島観光協会々長宅を訪問して、プレ調査と島内放送での周知もお願いした。

現地の留置調査では、高齢者に「私たちは夢も希望もないので結構です」と断られたり、勢いよく玄関を閉められたりする辛い経験もした。しかし一方では、島民の応援に勇気づけられることもあった⁽²¹⁾。

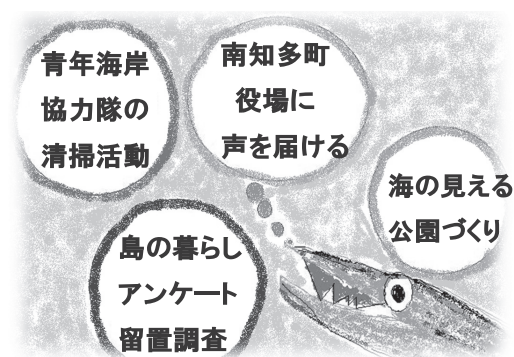


図5 篠島勝手に盛り上げ隊（デジコン入賞作）

質問紙は111世帯に配布でき、翌週59世帯の151枚を回収できた（世帯回収率53.2%）。学生たちは回収時に、医療や通勤通学に関する不便や要望等を直接聞かせていただき、改めて調査の社会的意義と、強い使命感を実感した。

その後、島民の切実な思いの詰まった調査用紙の量的及び質的検討を半徹夜で行い、調査報告書をまとめて南知多町役場にも届けることができた。こうして走り続けた1年間のSL活動は区切りを迎えるが、活動は翌年以降も継続された。

(3) ソーシャルアクション



図6 篠島ゴミ拾いレンジャー (2010)

2010年に3年生になった学生たちは、名古屋のNGOや篠島観光協会、篠島小学校、旅館や飲食店に呼びかけて清掃活動と「篠島の明日を考えるワークショップ」を連携して行い、年間を通しての観光PRに結び付けた⁽²²⁾。活動の中心となった学生は、本学が米国のキャサリン・デニス氏（ボランティア活動推進国際協議会事務局長）を招いて開催した「サービスマーケティングフォーラム」に登壇して、活動報告を英語でプレゼンする機会を得た⁽²³⁾。

さらに4年生の夏には教育実習や教員採用試験の合間を縫って「福祉教育研究フォーラム 高校生・大学生のつどい」でもプレゼンを行い、卒業論文「篠島におけるサービスマーケティング—福祉系大学生当事者研究—」を執筆して、SLにかけた学生時代の活動を総括し、巣立っていった。

4. 郷土資料館で「東奔西走」

(1) 絶景の地に立つ幽霊屋敷

知多半島の国道沿いでも、南知多町郷土資料館前からの眺望はとくに美しい⁽²⁴⁾。

2013年度、この資料館を拠点にSLを行った「東奔西走」班の学生たちがいる。

愛知県立内海高校が移転した後の校舎（1958年築）を転用した建物を訪れた学生たちは、景勝地にそぐわない「幽霊屋敷のような不気味な」外観と、「ボロボロに破れたカーテンの惨状」を目の当たりにして、「自分たちに何かできることはないか」との思いで活動をスタートさせた。

(2) 貴重な資料と破れカーテン

学生たちは資料館の文化財に触れ、ヒアリングを重ねた。館内には6000点以上の資料があり、古い漁具や木の板に書かれた船の設計図、山車等、約800点が展示されている。とくに、近くの林ノ峰貝塚から出土した縄文時代の人骨等は、県外から見学者も訪れる貴重な資料の宝庫である。



図7 東奔西走チーム（南知多町郷土資料館2013）

しかし、資料館職員は常駐しておらず、来訪者は入り口の説明に従って、ベルで

90m離れた図書室から職員を呼ぶ。職員は、見学者を残して戻っていくが、貴重な資料は倉庫に保管しており、盗まれるような物は展示していないとのことである。

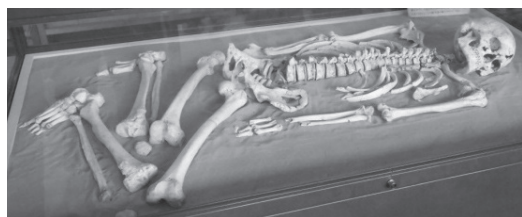


図8 貴重な縄文時代の人骨（資料館展示物2013）

学生たちは、壁の汚れや錆が目立ち、薄暗い館内の破れたカーテンの隙間から差し込む日光が、歴史資料を劣化させる現状を変えるべく、町への働きかけを試みた。



図9 展示室のカーテン（資料館2013）

（3）町の予算の壁

役場でヒアリングした結果、遮光性の高いカーテンは高価であり窓ガラスやサッシの補修が優先となって購入できないこと、カーテンの穴から光が漏れても大丈夫なように重要な資料は窓際に置かず保管している旨の説明を受けた。また、課ごとに割り振られた予算は重要な施設等に優先配分され、資料館は我慢してと言われると、予算が回ってくるまで現状維持で資料を守るしかないとのことであった。

学生たちは意気消沈しながらも、資料館の価値は何かと問うと、「郷土の歴史に触れ地域に愛着を持ってもらうために資料の保存は重要であり後世に伝えていきたい」との答えをいただき複雑な思いであった。

活動報告では、「学生だからできることがあるはずと始めたが、町の財政や人手不足等、学生の力ではどうしようもない壁にぶつかり、問題をグループで検討するだけで終わってしまった。しかし、地域課題へのアプローチ法を学んだので、この経験を次回につなげたい」と、悔しさを滲ませた。

中心となって「東奔西走」した学生は、3年に進級する春、後輩たちのSLバスツアーにメンターとして参加し、1年間の取り組みを報告するとともに「自分たちができなかった郷土資料館の改善を引き継いでほしい」と呼びかけた。ゼミ長会議でも何度か話題に上ったが、結果的にそれを引き継ぐ学生は現れず、現在（2016年夏）まで資料館の姿は変わらない⁽²⁵⁾。

5. 知多半島の文化を訪ねて

（1）ゼミ長会というコミュニティ

筆者のゼミの学生数は、1年「総合演習」が24～25名、2年「社会福祉基礎演習」が20名前後、3年「社会福祉専門演習Ⅰ」と4年「社会福祉専門演習Ⅱ」はそれぞれ10～15名前後で推移してきた。

学生たちは、知多半島を拠点として地域文化や地域福祉の情報収集を行ってきたが、その推進力は各学年ゼミ長（各2～3名程度）から構成されるゼミ長会議であった。

ゼミ長会議では、各学年ゼミの活動報告や討論、学外活動（学会やフォーラム、セ

ミナーや研修会、ゼミ合宿や出前講義等)の企画と運営を担ってきた。



図10 ゼミ長会議 (岡ゼミ2015)

(2) 郷土資料館再訪

ゼミ長会議を中心に企画、運営して各学年で取り組んだ学外活動を、学生有志が発展させる形で受け継ぎ、現在も活動するのが、チーム「フクシア」である。

2016年の早春、「フクシア」のメンバーで前述の郷土資料館を再訪した。図書室にも立ち寄り、知多の貴重な文献や資料に触れたことで、新たな活動に火がついた。

知多半島の中学教師と生徒が聞き取りや版画の挿絵を作った『知多のむかし話』(続編、続々編計3冊)を見つけた学生たちは、大学図書館で読んで馴染みのある本ではあったが、知多半島先端の地で紐解くことで改めて民話の力に感動した。民話の良さを地域の子どもたちに語り継ぎたいと意見がまとまり、絵本と紙芝居を作成することになった。その後、南知多にお住まいの切り絵作家、山崎修先生をお訪ねして活動を報告し、原画の制作に関するご指導をいただくこともできた。

一行は、伊勢湾側から三河湾側の片名に移動して、チッタナポリの会議室で民話や町の資料を読み合い、候補に選んだのは、「百姓のお茶づけ (河和)」、「ミミズを食べさせられた男 (北方)」、「牛皮の姓 (小野浦)」、「うみぼうず⁽²⁶⁾ (布土)」、「奥田の勘

治狐 (奥田)」の5作品であった。

(3) 布土の海ぼうず

学生たちは、百姓のお茶づけを羨ましがめる河和山のお殿様に笑い、ストーリーの続きを考えたり、奥田の勘治狐にだまされそうになったりと、民話の世界に遊んだ。

最終的に絵本や紙芝居の素材として決まったのは、美浜町布土海岸に出る大きな海ぼうずの話である。小さい子どもにも「『こわいよー』と喜んでもらい」、民話の豊かさをわかりやすく伝えるにはどうすればよいか、原文や原画を誰が担うのか等、知恵を絞った。画風が変わっても書き手の個性が出るのでよいのではないかと、地域の小学校やサロンに出向いて、子どもたちや保護者、住民等、多くの方に紙芝居や絵本、カレンダー等を披露して、地域の文化や自然の良さを共有するワークショップを開催しよう等と夢は膨らんでいる。

収録されている昔ばなしはシンプルだが、学生たちは舞台となる布土海岸や時志観音、布土川周辺のフィールド探索や写真の共有を踏まえて、場面設定や登場人物のキャラクター、セリフ等に彩を与え、自由に構成と工夫を重ねている。



図11 「海ぼうず」原画 (美浜キャンパス2015)

以下は、学生たちと著者が作成中のス

トリーである。

ないか」。

(4) 布土の海ぼうず

①美しい知多の海

知多半島に美浜町という美しい浜辺の町があります。三河湾を臨む布土海岸では、子どもたちが元気に遊んでいます。

②カサ太郎

おや、カサ太郎がやってきました。「こ
こらで一休みしよう」。カサ太郎は腰をお
ろすと、おむすびを食べ始めました。「うー
ん、うまいずら」、「ミカンも、うまいずら」、
「さて、行くとしよう」。カサ太郎は、おむ
すびを包んでいた竹の皮を「ポイ」、ミカ
ンの皮も「ポイ」と海に投げました。

③海からの声

すると、沖の方で何かが顔を出し、「海
にゴミを捨てたのは誰だあ？」とつぶやき
ました。でも、カサ太郎はちっとも気がつ
かず、行ってしまいました。

④みんな家に帰る

やがて日が沈み、辺りがだんだん暗くな
ると、「カアーカアー」とカラスも山に帰
ります。「もっと遊んでいたいよお」と言
う子も、「海ぼうずが出るよ」と言われて、
あわててお家に帰ります。

⑤布土の暗い海

星が瞬き、月がキラキラと海原を照らす
浜辺を、カサ太郎が戻ってきました。「人っ
子ひとりいない寂しい浜だなあ」。その時、
後ろから「今晚は」と声をかけられて、
カサ太郎は跳び上がりました。「うわあ！
だ、だ、誰かと思ったら、権兵衛さんじゃ

⑥時志観音に安産祈願

権兵衛は提灯をかざしながら、「カサ太
郎さん、どこに行っていたのかね」と尋ね
ました。カサ太郎は、「おっかあの安産祈
願に時志観音にお参りに行ったんだが、な
にしろ遠い上に、観音様の階段がきつくて
遅くなってしまったんだ」と答えました。

⑦海ぼうずが出た！

カサ太郎が「ここらは海ぼうずが出ると
いうからおっかなくてしょうがない」と言
うと、権兵衛は「海ぼうずは大きいという
が、これくらいかね」と、背伸びをして見
せました。「いやいや、もっと大きいらし
い」、「それじゃあ、これくらいかね」と、
権兵衛は2メートルくらい背伸びをし
ました。「いやいや、もっと大きいらしい」、
「そおれじゃあ〜、こおれくらいかねえ〜」
と、3メートルくらいになりました。そ
れを見たカサ太郎は、「うわああ、海ぼう
ずが出たあ〜！」と叫んで、一目散に逃げ
だしました。

⑧布土川

カサ太郎は、履いていた草鞋も脱ぎ捨て
て、布土川の畔を、家を目指して走りに走
りました。川面には星と月が映って布土川
の白い砂もキラキラ輝いていますが、カサ
太郎の目には大きな海ぼうずが焼きついて
離れません。どんどん、どんどん走って、
やがて山の麓に、ぼうっと灯が見えました。
「家の灯だ！」

⑨家の戸口で

やがて家に着くと、戸口に息子が待って

いて、「おっとうが遅いから、おっかあも心配しているぞら」と言います。「それが、お前、布土の海ぼうずが出たんだよ」とカサ太郎が言うと、息子は、「その海ぼうずは、こおんなに大きかったかねえ〜?」と言って、3メートルもある海ぼうずになりました。カサ太郎は「どひゃああ!」と腰を抜かしました。

⑩布土の海

それから半年が過ぎました。布土の海に、カサ太郎一家がやってきました。カサ太郎は上の子どもたちの手をひいて、そしてカサ太郎の女房は、生まれたての赤子を抱えています。カサ太郎が、「ワシは、海にゴミを捨てて海ぼうずを怒らせてしまった」と言うと、子どもらは口々に「うん、こんなに綺麗な海から、たくさんの魚や海苔や貝がとれるんだよね」、「おっとう、おっかあ、今日はみんなで、浜辺の掃除をしよう」、「おらも手伝う」と口々に言いました。そんな一家の姿を、鳥も魚もお日様も、ニコニコして見えています。そして、沖の方から何かが顔を出して「ありがとう〜」とつぶやき、海の底へ潜っていきまじたとさ。

おしまい

6. アクティブラーニングを巡って

(1) 「深い」学びに向けて

筆者のアクティブラーニングの試みと実証的研究は緒についたばかりである。アクティブラーニングは単なるディベートや体験学習で終わる「浅薄なもの⁽²⁷⁾」でなく、「学びの量とともに、質や深まりが重要⁽²⁸⁾」とされて、「どのように学ぶか」が議論されている。

田村(2016)は、中教審の論点整理(2015)で示された資質・能力の育成に向けたアクティブラーニングの視点として、①問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの課程が実現できているか、②他者との協働や外部との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの課程が実現できているか、③見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの課程が実現できているかが重要であるとした⁽²⁹⁾。

(2) 学生の変容・成長の場

知多半島を中心として活動した筆者のゼミ生たちは準備段階で活動内容や活動先を「自己開拓」するために、メンバーとの相談や活動先の選定、先方との交渉が不可欠で活動目的や方法を言語化し他者と対話をせざるを得ない状況に置かれる。

また、教室で組み立てた企画が現実社会の不条理に突き当たり挫折や葛藤を経験して立ち往生もするが、文献や討論によって新たな道筋を見出して課題解決に結びつくこともあった。そのようなフィールドでの経験と文献研究を前提としたリフレクションでは、グループKJ法が力となった。さらに、異年齢の縦割りゼミ生たちが学会等で学び語り合う経験は、自己を対象化し社会性を涵養する場ともなった。

(3) 複合的なコミュニティ

一方、学生たちとの活動は少しずつではあるが地域の中に浸透しつつある。たとえば、布土の海ぼうずの話を聞いた布土小学校の担任の先生から「クラスの子どもたちに絵本や紙芝居を披露してください」と、嬉しいお誘いをいただいた。

また、地域で発表する場所を探していた時に、今秋オープンする「山の広場」の関係者の方とつながることもできた。場所も布土から近いため、舞台発表やグループワーク等、多様な企画も考えられる。



図12 山の広場（美浜デイズ2016）

本稿では、知多半島を拠点とした活動を報告したが、筆者は同時に、「福祉科教育法」の講義や学生実行委員会が中心となる「福祉教育研究フォーラム・高校生と大学生のつどい」等の企画・運営の支援も担当してきた。

そこではゼミと講義、高大連携事業等が有機的に連携し合うことで、新しい学びの地平が拓かれてきた。たとえば知多半島を拠点とした活動の集大成・報告に加えて、HBV感染による健康被害等の当事者参画研究を福祉課題として受け止めて教材化する活動等を行った。学生たちはその成果を、本学社会福祉学部が高大連携協定している福祉系高校等への出前講義として組み立てて、高校生と学び合うなど、「学び手が主役」の活動を多様に展開してきた。その過程で、高大連携事業に参加した高校生が本学に入学して福祉系高校教員を目指すなど、学びの好循環も起きている。

今後、高校生や大学生、卒業生らと

もに、福祉課題を解決する社会システムの再構築を目指して、多様な学びの創出を行いたい。

謝辞

本稿を作成するにあたりご協力いただいた地域の皆様や大学教職員、岡多枝子ゼミ研究生の宮下真香氏はじめ関係各位に感謝申し上げます。

本稿で取り上げた内容は、平成23～26年度文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金（基盤C）「持続可能な福祉社会における福祉系高校のレリバンス」、平成25～27年度厚生労働科学研究費・AMED補助金（研究事業）「集団予防接種等によるHBV感染拡大の真相究明と被害救済に関する調査研究」の「教育・啓発」分担研究の成果の一部である。

注一覧

- (1) 中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」。
- (2) 文部科学省HPや研究書の多くは、「アクティブ・ラーニング」と表記しているが、本稿では、「アクティブラーニング」とする。
- (3) 中教審ではアクティブラーニングを、「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、

- 調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」としている。
- (4) 溝上慎一 (2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂。
- (5) 蔣妍・溝上慎一 (2014)「学生の学習アプローチに影響を及ぼすピア・インストラクション—学生の授業外学習時間に着目して—」『日本教育工学会論文誌』38(2)、pp. 91-100。
- (6) 日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科1年 岡多枝子ゼミ24名 (2008)『「総合演習Ⅰ」報告集—地域に学び仲間と創る』。
- (7) 岡多枝子 (2009)『「総合演習Ⅰ」の進め方の事例—岡クラス『地域に学び仲間と創る』』『日本福祉大学社会福祉学部総合演習Ⅰの手引き2009年度版「学問への道」』日本福祉大学社会福祉学部。
- (8) 岡多枝子 (2011)「社会福祉系大学生の体験的学びとキャリア形成—『つながる力』へのアプローチを目指して」『現代と文化』第122号、pp. 61-74。
- (9) 岡多枝子 (2016)「高大接続福祉教育におけるアクティブラーニング：新たな福祉課題（地域包括ケア・IPE・健康被害）『龍谷教職ジャーナル』。Ryukoku journal of teacher education, issue 3, pp. 61-66.
- (10) 蓮見音彦・似田貝香門・矢澤澄子編 (1997)『現代都市と地域形成：転換期とその社会形態』東京大学出版会。
- (11) 金子勇・森岡清志編著 (2001)『都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房。
- (12) 木戸利秋 (2010)「今年度のサービスラーニングをふり返って」『2009年度サービスラーニング活動報告集』。
- (13) 日本福祉教育・ボランティア学習学会の会場となった同志社大学を借用して、京都に在住されている川喜田晶子氏 (KJ法教育者) を招き、ゼミでKJ法研修会を開いた。当日の運営は学生が中心となっており、テーマは学生有志が行った災害ボランティアでの経験を取り上げた。
- (14) 川喜田二郎 (1986)『KJ法—渾沌をして語らしめる—』中央公論社。
- (15) グループKJ法を通して、学生たちと筆者は、川喜田 (1986) の作法を踏襲しながらも、現在のITや文具の発展に伴う工夫 (PublisherやPowerPoint、ポストイット等の活用) や、色画用紙やA4用紙上で島を作成後に配置する等の考案を行ってきた。手法はゼミや講義、研究会等で共有するとともに、教職課程学生を中心に高校出前講義や「高校生と大学生のつどい」等で活用してきた。
- (16) 川喜田二郎 (1967)『発想法—創造性開発のために—』中央公論社。
- (17) 川喜田二郎 (1970)『続・発想法—KJ法の展開と応用—』中央公論社。
- (18) 学生たちは、行事の度にスーツ着用、言葉遣いから姿勢やペンの持ち方、板書の筆順、席次や乾杯の作法まで細かく注意する教員に辟易しているかもしれないが、高い授業料を払っている保護者には感謝されるのではないだろうか。
- (19) 農林水産省東海農政局半田統計情報出張所編集 (1999)『島はもうひとつの学校：南知多篠島・日間賀島』半田：愛知農林統計協会知多支部。

- (20) 『愛知県史民俗調査報告書1篠島』
(1998) 愛知県総務部県史編さん室。
- (21) たとえば、篠島で食堂を営んでいる方が、学生たちの活動に共鳴して「篠島勝手に盛り上げ隊」への参加を表明してくださった。
- (22) 活動は中日新聞でも報道された(2011年3月15日付)。
- (23) 発表原稿の英訳やプレゼン指導は、国際福祉開発学部の教職員の多大な支援を受けた。お蔭で当日は原稿なしで発表した。
- (24) 内田佐七家方面から内海海岸に出ると、かつて100万人の海水浴客で賑わった白砂と夕日は今も美しい。国道247号を小野浦方面へ向かい、坂道を登り詰めると青い海原が開けてホテル魚半やピアシティ、望水荘が緑の中に点在する。伊勢湾対岸には津市庁舎が光り、早春には菜花の先に鈴鹿山脈の雪景色を望む。その地に、南知多町郷土資料館は建つ。
- (25) 「南知多町郷土資料館収蔵資料の調査整理に伴う展示品の移転について」。郷土資料館では、平成30年度の建物解体撤去に向けて、内海高校旧校舎の南知多町郷土資料館建物は平成27年度から平成29年度の3か年で収蔵資料の調査整理・移転を進めている(南知多町HPより)。
- (26) 文献は「うみぼうず」とあるが、学生たちと決めた「海ぼうず」で表記する。
- (27) 溝上慎一(2010)「概説 アクティブ・ラーニングとは」『教育改革ing』、pp. 44-46。
- (28) 中央教育審議会教育課程企画特別部会(2015)「教育課程企画特別部会 論点整理(案)」。
- (29) 田村学(2016)「新教育課程がめざすアクティブ・ラーニングとは」『新教育課程ライブラリ Vol. 1 新教育課程型授業型授業を考えるーアクティブラーニングの理論と実践』ぎょうせい。